

隠岐三型アクセントはどのように成立したか
「アクセント核はどう変わるか」補説¹
How did Oki dialects shift to a three-type accent system?
Addenda to “How do accent kernels mutate?”

児玉 望

KODAMA Nozomi

キーワード：三型アクセント、日本語アクセント史、昇り核化、外輪式、中輪式

1. はじめに

広戸惇・大原孝道(1953)の詳細な記述のある隠岐の諸地点の三型アクセントは、東京方言のような位置アクセント体系とは異なる「種類のアクセント」というべきアクセント類型の確立に大きく関わってきた²。それとともに、九州西南部や琉球諸方言を含むこの類型がアクセント系統史とは直接関係しないということも、名義抄式体系や九州二型の複合語アクセントで共通する「式保存の法則」が成り立たなくなる変化を隠岐の体系が経ているという上野(1984)の指摘のように、研究の早い段階から認められてきた。この変化は、名詞2-2/3類と3-2/4類の合流を伴う変化であり、京都でのアクセント変化では文献上実証され、京都を含む中央式や、内輪・中輪・外輪のいわゆる東京式アクセントでも共通に経たであろうと考えられてきた、いわゆる「連低類の高起化」、つまり、2音節以上の「低(L)」の連続は、「高(H)」が接続する場合に、最後のLを残してその前がHに変わった、という変化である。

筆者は、①「種類のアクセント」のアクセント変化は「位置のアクセント」のアクセント変化とは異なるはずである、②「種類のアクセント」と「位置のアクセント」の間にどんな変化がありうるかが説明されなければならないという問題意識で、児玉(2014)以来、位置アクセント体系から生まれた種類のアクセントの体系、という観点で隠岐アクセントの系統分化を考えてきた。児玉(2017)では、「連低類の高起化」を「上げ核が対立する位置アクセント体系の上げ核(“L*”)が降り核(“*L”)に変わる変化」とみて、隠岐の二型・三型アクセントは、新田哲夫(2012)を皮切りに松倉昂平(2014)以降、詳細な記述が現れるようになった越前嶺北地方の二型・三型アクセントと同様に、本

¹ 本研究は JSPS 科研費 (課題番号 15K02484) の助成を受けたものである。

² 服部四郎(1973), 上野善道(1975,1977,1983,1984,1989), 早田輝洋(1977,1983), 川上夔(1975,1983)など。

来の無核型が現在の白峰アクセントの下降式の音形になっていた体系が、①中央式と共通の語頭降り核が無核化して下降式との式対立を成す、②有核型の核の音調変化に伴い3拍語末核型(3-4類)が下降式無核型(3-1/2類)へ合流する ③次語頭核型が唯一の有核型として核の位置対立を失ったことにより、核としての性質を失って第3の無核型化となる、という式体系化を経て「種類のアクセント」への変化が進行したと考えた。「連低類の高起化＝上げ核の降り核化」を中央式・内輪式・中輪式と共通の変化とみる点ではそれ以前の立場と同じである。これは、この変化が2-2/3類と3-2/4類の合流をもっともよく説明すると考えたからである。

しかし、児玉(2019, 2020)は、降り核化を経る前の上げ核の段階においても2-2/3類と3-2/4類の合流が起こりえた可能性を指摘して、中輪式が外輪式と共に、上げ核から昇り核への変化を経た上で下げ核化する、という中央式・内輪式とは異なる変化の経路を想定できることを示し、隠岐の三型体系についても、降り核化を経たと考えられる越前三型とは異なり、昇り核化を経ていると考える可能性があることを示唆した。本稿では、この仮説について詳細を述べた2021年度日本音声学全国大会での口頭発表の内容を整理し、説明を補足する。

音声学の口頭発表では、まず、語頭「昇り核」が語頭「降り核」と同様に、発話の冒頭で不安定になりやすく、「降り核化」に端を発する三型化が「昇り核化」によっても想定できることを述べ、その場合の「本来の(下降タイプの)無核型」がどのような音形であったと想定されるかを述べた。さらに、一致する点の多い越前三型と隠岐三型の型の統合の中で不一致がみられる場合について、「降り核化」と「昇り核化」の違いに関連づけた説明ができそうなものをあげ、隠岐三型体系が、対岸の出雲外輪式や中国中輪式と同様に昇り核化を経ていると主張した。

この中で、特に重要だと思われるのが、用言の活用形のアクセントの違い、特に、名詞2-2/3類と3-2/4類の合流によるアクセント型が、両体系ともB型の所属となるが、名義抄式で名詞2-2類と同じ音形だったと考えられる、2拍の第1類動詞連用形のテ接続形が、越前二・三型では名詞2-2/3類と同様にB型になるのに対し、隠岐二・三型では本来の無核型に対応するA型になっている、という点である。この違いは、岡山・但馬を除くほとんどの内輪式体系で第1類動詞テ接続形が名詞2-2/3類と同様に語末(連用形末)核型となるのに対し、中輪式・外輪式では無核型となる、というのとほぼ平行的に見える。

金田一春彦(1972)は、「魚」「風が」「堅い」「寝れば」「当てた」のように、品詞や語構成が異なるが同じ音調と認められるグループをまとめた上で、近畿方言ではなく中国地方の

方言とよく対応していることを示し、隠岐諸体系の祖形を「中国方言の祖形に雲伯方言の性格をすこしまじえたようなもの」とした。しかし、近畿方言と中国・雲伯・隠岐共通の対応のずれ、たとえば前者で「山が」「川が」と同じ型になる「当てた」が後者ではどんな変化の結果型が分かれたのかについては言及していない。

山口幸洋(1985)が指摘しているように、本来は名詞の類統合による類型分類であるはずの外輪・中輪・内輪の3体系で、用言の活用形ごとのアクセント型、特に、本来の無核型(名義抄式で高起あるいは去声はじまり)の語形に関する有核型の分布は、かなりよく一致した分布になっている。本稿では、上述の名詞2-2/3類と3-2/4類の合流変化が動詞に及び得たかどうかの違いを説明する仮説を提示することにより、児玉(2020)では十分に論じていない、中輪式体系が中央式や周辺諸体系の経た降り核化とは異なる経路の変化を経て成立したと考えるべき根拠を提案する。

2. 名詞2-2/3類と3-2/4類の合流

名義抄式を上げ核体系と解釈した児玉(2017)では、名義抄式の下降については核ではない「語末下降」の実現と見て、語末核型(1-3,2-3,3-4各類)以外のアクセント型は、それぞれ下降のない高結式と下降のある低結式の2つの「式」をもつ、と分析した。中央・内輪・中輪の各体系で起きた名詞2-2/3類と3-2/4類の合流は、これらの中央日本の体系では2音節以上の無核低結式の語で語末音節全体がLとなるよう下降位置が固定する改新があり、この音形に、降り核化した語末核型が合流したものとして、名詞2-2/3類と3-2/4類の合流を説明した。

京都ではこの「低結式」に、降り核化に先立って、川上夔(1997)が「助詞アクセントの弱化」と呼び、「平安アクセント」と「講式アクセント」を隔てるとした重大な変化が起きる。平安アクセントではこれらの語に高く接続して「くぼみ音調」の文節を形成していた助詞が、低く接続するようになるという変化である。この変化は、金田一(1977)が音韻変化としてのアクセント変化、つまり、語の種類に関わりなく同じ音調であれば起こしやすい変化として、「山の単一化の変化」「後の山の消滅の変化」と呼んだものにあたる。これに対して、川上の用語は、助詞のうち「高起」であったものがその高起性を失って「無印化」した、という助詞の側の変化と解釈するものである。

しかし、この変化が助詞ではなく自立語の側、つまり、拙論にいう「低結式」の型に起きた変化であるとする分析も可能である。そうであれば、名義抄式に代表される「平安ア

クセント」の低起式は、後続する助詞との間にくぼみ音調を形成するような境界特徴であり、これが「講式アクセント」では単なる下降に変わった、ということになる。

この分析を支持する証拠はほかにもある。「平安アクセント」で高結式に対して低く接続する低起の助詞、拙論でいう有核の付属語、たとえば助詞「モ」「へ」「ヨリ」や助動詞「ナリ」には、低結式に接続する場合に東声点（下降調）や上声点(H)が付される例が多いことが知られている。このことを児玉(2019, 2020)では名義抄式の段階ですでに低結式の語末Lが語末上げ核の性質を部分的に帯び始めている、と解釈したが、むしろこの上昇は、くぼみ音調を要求する低結式のアクセント型固有の特徴であった、とみることができるのである。

声調言語研究において、このようなくぼみ音調 H]L[H は、tone levelling を起こして HHH に変化しやすいことが知られている。無核低結式と高起（無核）付属語の連続に対して tone levelling が起きれば、高結式との弁別は失われる。この結果は、「外輪式」の型統合、つまり 2-1/2 類、3-1/2 類の統合となる。一方、金田一(1972)の「山の単一化」だけが起きて「後の山」ではなく「前の山の消滅の変化」が起り得たとしたら、LL[H となり、語末核型との弁別が失われる。正確には、語末の L に先立つ下降が必須ではなく任意となる変化であり、2-2/3 類と 3-2/4 類の合流の結果、文節末は XL*[-H となる。

以上の変化の可能性は、くぼみ音調 H]L[H が不安定であることを示すものであり、名義抄式のこの音調を保持した体系は現存せず、次の 3 つのいずれかの変化を経た、とまとめることができる。

(1) 無核低結式語末音節]L[の変化（名詞では 2-2, 3-2 各類）

- a.]L （上昇の任意化）： 2-1/2/3 類, 3-1/2/4 類の対立保持
 >]L* （上げ核の降り核化）： 2-2/3 類, 3-2/4 類の合流
- b. H （下降・上昇の任意化）： 2-1/2 類, 3-1/2 類の合流
- c. L*[（下降の任意化・語末核化）： 2-2/3 類, 3-2/4 類の合流

このような三者択一の変化があったと想定すれば、内輪・中輪・外輪の 3 種類の似た体系のそれぞれ地理的に不連続な分布を、系統分岐としてではなく、それぞれに地理的に隣接した地域での変化として説明する上では都合がいいが、型の統合の異なる外輪式は(1)b に結び付けられるものの、中輪と内輪の関係はもう少し複雑になる。

京都方言では、(1)a、つまり「助詞アクセントの弱化」を経た体系「講式アクセント」が、南北朝期に、語末核型(2-3, 3-4 各類)で起きた「上げ核の降り核化」の結果として、2-2,

3-2 各類の音声は変化しないままで 2-2/3 類, 3-2/4 類が合流した。(1)a では型の統合は起きないので、この変化を経た体系の 2-2/3 類, 3-2/4 類の合流は、京都と同様の「降り核化」を経た結果であると考えなければならない。これに対して、(1)b あるいは(1)c の変化を経ている体系は、これに続いて「降り核化」と「昇り核化」のいずれかが起こり得る。つまり、2-2/3 類, 3-2/4 類の合流が起きている中輪と内輪の体系については、(1)a と「降り核化」、(1)b と「降り核化」、(1)b と「昇り核化」の 3 つの組み合わせがありえたことになる。

内輪体系と外輪体系の定義は、1 拍名詞の 1-2 類が 1-3 類と合流して有核型となるか 1-1 類と合流して無核型となるかの違いであるが、児玉(2020)では前者の変化を、上げ核(L*[]) 体系から降り核(JL*)体系を経て下げ核(H*[])化する過程での有核型(1-3 類)側の変化による合流と分析した。これに対して、1-2 類は無核低結式の型であり、1-1 類との合流は、低結式の境界特徴が失われる、という変化であるので、1 拍語形の型についても(1)a-c と平行的な変化を想定できる。「助詞アクセントの弱化」を低結式側の変化とみれば、1-2 類や 2-5 類のような、下降と上昇の間の「くぼみ」が一拍に満たない長さでしか実現できない語長では、川上(1997)の「音調の谷」(”)[“と表記する)があったと考えられるが、これは「くぼみ」が 1 拍の場合よりさらに不安定だったはずである。

(2) 1 拍無核低結式語末音節 H[] の変化 (名詞では 1-2 類)

- a. H[] (上昇の任意化) : 1-1/2/3 類の対立保持
 >H*[] (上げ核の降り核化を経た下げ核化) : 1-2/3 類の合流
- b. H (下降・上昇の任意化→喪失) : 1-1/2 類の合流
- c. L[] > L*[] (下降の任意化) : 1-2/3 類の合流

つまり、この自立語側の変化による合流の可能性は 1 拍語形についてもありえ、中輪と外輪の体系は(2)b の変化が起きたと考えられるのに対し、内輪式は(2)a と(2)c の二つの可能性があり、後者は必ずしも降り核化を要求しない、ということがわかる。この点で興味深いのが、山口(1985)が、但馬・岡山の内輪体系は用言のアクセントに関しては内輪というよりは中輪に近い、としている点である。また、これとは逆に、金田一(1977)は、四国西端の南北両宇和郡から幡多郡のアクセントについて、1 拍名詞の型の統合の点では「中輪」であるが、『動詞+』の形などから見るとこれは内輪東京式であると断じている。このようなヴァリエーションの存在は、低結式の変化と「降り核化」「昇り核化」の有限個の組み合わせの中で、内輪式と中輪式に帰結する組み合わせがそれぞれ複数ある、という予測にうまく合うのである。特に興味深いのが、山口(1985)の指摘した、動詞アクセント

のパターンと内輪・中輪・外輪のパターンの相似とずれである。2-2, 3-2 類が中輪式・隠岐では名詞と動詞で異なる変化を経ていることを先に述べたが、同様の名詞と動詞での分裂は、内輪体系の 1-2 類についても言える。名詞では 1-3 類に合流するのに対し、1 類動詞 1 拍連用形のテ接続形が無核となるという分裂が、地理的に不連続な内輪式に共通してみられる。これは、「降り核化」による有核型のピッチ変化によって起きた類の統合が音韻変化として品詞に関わらず起きたのに対し、(1)a-c や(2)a-c の無核低結式側に起きたアクセント変化は、形態変化としてのアクセント変化であり、名詞と動詞とで異なる経路をとった、という仮説を強く支持すると考える。

3. 福井三型と隠岐三型

隠岐二・三型と似た体系として、新田哲夫(2012)、松倉昂平(2014, 2017)、松倉・新田(2016)など福井県嶺北地方の二・三型アクセントの詳細な記述が進んでいる。隠岐と福井の体系の実現形は大きく異なり、さらに、隠岐以上に福井の各体系ごとの実現形の違いも大きい。型の統合の点では非常によく似ている。これは、無核型だけから成る体系では型の弁別が維持できればピッチ形は変異してもよい、という、位置アクセントの特徴によるものであるとみられる。それぞれの祖体系は三型であると考えられるので、福井三型と隠岐三型の 3 系列の名詞の類別との対応のみを表 1 と表 2 に示す。

表 1: 福井 3 系列の名詞の類対応

1-1	A	2-1	A	3-1	A
1-2	B	2-2	B	3-2	A
1-3	C	2-3	B	3-4	A
				3-5	B
1-4	A	2-4	C	3-6	C
1-5	A	2-5	C	3-7	C

表 2: 隠岐 3 系列の名詞の類対応

1-1	B	2-1	A	3-1	A
1-2	B	2-2	B	3-2	(A) ³
1-3	C	2-3	B	3-4	A
				3-5	B
1-4	B/C	2-4	C	3-6	C
1-5	C	2-5	C	3-7	C

2・3 拍語では二つの体系はほぼ共通で 1 拍語の類対応のみが異なる、という関係は、内輪式と中輪式の関係と平行的である。1 拍語については、次のような中央式・中輪式との平行性が観察される。

I. 1-1/2/3 類を保持：中央・福井 1-1/2 類が統合：中輪・隠岐

³ 松倉・新田(2016: 83)は 3-2 類は「まとまりを欠」くとする。

II. 1-1/4/5 類が統合：中央・福井 1-3/5 類が統合：中輪・隠岐

IIの「去声(上昇調)」の1-4/5類は、京都では「講式アクセント」の段階で起きたことが文献で実証される変化である。京都以外では方言資料として確認できる語が名詞では1-4類で「巢」、1-5類で「齒」のそれぞれ1語であり、隠岐の「巢」は広戸・大原(1953:157)によれば島前でC系列、島後でB系列と分裂しており、中輪諸方言でも東日本で有核、西日本で無核と分裂している。ただし、後述するように、2類動詞の1拍語形が「平安アクセント」でこれらの型であったことが知られ、動詞アクセントも加えて再建すると、中輪式ではほぼ1-3/4/5類の統合とみていいと考える。

この違いを除くと両体系の型統合が非常に似て見えるのは、両者が核の位置対立を失って複数の無核型が対立する体系となった、という変化の過程の共通性によるものであると考える。

(3) 非核化による三型アクセント化

- a. 上げ核の（降り核化／昇り核化）の結果、不安定な語頭核が非核化＝C系列
- b. （降り核化／昇り核の下げ核化）の結果、3拍語末核型(3-2/4類)が、下降タイプであった本来の無核型と合流して非核化＝A系列
- c. 2・3拍名詞での核の位置対立を失った結果、残った有核型が非核化＝B系列

(3)aの、語頭上げ核が非核化した体系は、中央式周辺に垂井式・加賀式・白峰式・讃岐式・八幡浜式など共通してみられ、また、本来の無核型が2拍目の後に下降のある系列として下降式のまま残存している白峰式(新田 1985)や、3拍語末核型と合流して有核型となった加賀式体系があることを考慮すると、福井三型はこれらの体系と同様、上げ核の降り核化を経たものであると考える。

これに対して、隠岐三型は、まず、本来の無核型が1拍語と2・3拍語で異なる系列に分裂していたと考えなければならないし、また、降り核化と昇り核化を経た下げ核化との両方の可能性があり、どちらであるかにより再建される本来の無核型が異なる。

児玉(2017)のように降り核化を経たと見るならば、1拍無核型の1-1類が1-2類側に合流し、2拍以上の無核型は、白峰式と同様な下降式であるということになる。これは上野(2012)で示された祖体系からの隠岐N型の変化とほぼ同じである。一方、昇り核化説を採れば、(3)bで語末核型と合流する無核型は、下げ核の2拍語末核型あるいは3拍語末核型と同形だったはずで、つまり1拍では白峰式の2拍目下降の系列、2・3拍では3拍目の後に下降が現れる系列、ということになる。後者のタイプの系列性を示す無核型は、上野(1992,2002)

で報告されている萩・見島方言に実例がある。この方言も(3)aのタイプの語頭核の非核化を経たとみられ、この結果生じた無核型が、1・2拍語では非下降であるが、これらの語に助詞が接続した文節では3拍目の後に下降が出、また、3拍以上の語は遅くとも3拍目の後で下降するという系列性をもつのである。また、広戸・大原(1953)の記述する隠岐諸地点のピッチ形のうち、島前と島後南部は比較的均質的で、A系列は遅くとも3拍目の後までに下降があるという系列性であり、昇り核説から導かれる下降タイプ無核型の系列性と近いものになっている。

降り核化説を採る場合には、2・3拍語の低結式が(1)aを経ているか、(1)cを経た段階ですでに語末核型との合流を経ていたかのいずれかとなる。これに対し、隠岐の1拍語では1-2類が(2)aの変化を経た段階で1拍の無核高結式が2拍以上の無核型との系列性を失って1-2類側に合流した、とみることになる。高結式側が変化して低結式に合流するという、あまり見られないタイプの変化である。これに対して昇り核化説では1-2類が(2)bの変化を経る無核型の1-1類と合流、2・3拍語の低結式は(1)cの変化を経た語末核型との合流という変化となる。低結式が1拍語と2・3拍語で異なる側に合流する変化と見なければならぬのは、中輪式と同じである。

以上、隠岐三型の名詞のアクセント変化は、降り核化によっても昇り核化によっても説明できることを述べた。これに対して、動詞のアクセント変化は、中央式や福井三型のような、(1)aを経る降り核化とは異なる経路を経ていることを示唆する。

福井3型の動詞語形のアクセントが中央式とよく対応することは、新田(2012)が高知方言動詞語形との比較によって示している。この対応が名詞の類対応で示された「降り核化」による変化として説明できることを示し、隠岐の動詞語形との共通点と相違点について考察する。

表 3: 平安時代の動詞語形4系列の名詞類別との対応

1類連体 (/未然)	(H)	(=1-1)	HH	=2-1	HHH	=3-1	HHHH
1類連用他	H][=1-2	H]L[=2-2	HH]L[=3-2	HHH]L[
2類連体 (/未然)	([[R)	(=1-4)	L*[H	=2-4	LL*[H	=3-5a	LLL*[H
2類連用他	[[R][=1-5	L*[H][=2-5	LL*[H][=3-5b	LL*[H]L[

「降り核化」以前の「平安アクセント」の動詞の活用語形とアクセントをもたない付属語（「接辞」）の接続形については、屋名池誠(2004)が詳述している。活用形とこれらの付属語接続形を本稿では「動詞語形」と総称し、その音節数に応じたアクセント形が動詞の

(形態論的) 類別と活用形とに応じた4つの系列を成すものと分析する。この4系列のアクセント形を、3拍以下の語形については名詞の類別との対応を加えて表3に示す。

名詞と同様、「低結式」はくぼみ音調の境界特徴が加わっていると分析できる。このくぼみ音調が1拍分のLをもつのは、無核の1類動詞では2拍以上、2・3拍の語形で次末核の2類動詞では4拍以上の次末核の動詞語形である。屋名池(2004)は、未然形接続のバとズを、拍数に関わらず常にHLに終わる動詞語形の内部要素と分析する。この分析は、未然形に接続する多くの助動詞がアクセントをもたない「接辞」として未然形と統合することから、未然形をアクセントをもたない束縛形式とみる考え方である。しかし、これらの未然形統合語形の低結式は、くぼみ音調のLの語末1拍分の実現に語形の拍数が関与する。未然形の拍数に関わりなくLで現れる「ば」と「ず」が、統合語形ではなく、有核の]L*[のアクセントをもつ付属語とみれば、これに接続する未然形が常にHで終わる連体形と同様に高結式の系列を構成すると分析できることを、表3では括弧内に示した。動詞語形に付属語が編入されるかどうかは付属語側のアクセント的性質によって決まる、というのは、「種類の体系(N型アクセント)」の特徴であり、この観点では未然形のアクセント型は、固定したアクセントをもつ付属語の前に現れるはずだと考えられる。

京都の表3の動詞語形が名詞と同じ降り核化を経た補忘記式では1類動詞が無核、2類動詞が有核または上昇調という系列性は崩れ、有核型は、語頭核となる2拍語形で低起式無核になり、無核型は低結式系列の活用形が語末核型と合流して有核となる。語頭核が空き間となった結果、中央式では降り核が前の拍に置かれた下げ核と再解釈され、本来は核ではなかった語末下降をもつ1-2/5類や2-5類の対応語形が新たに語末(下げ)核型として有核になる、というのが中央式に共通の改新であり、高知方言はこの段階のアクセント実現型を保っていることで知られる。

表4: 福井3型の動詞語形の所属系列

1類終止連体			A	=2-1	A	=3-1/2/4	A
1類 -タ接続	B	=1-2/5	B	=2-2/3	A	=3-1/2/4	?
2類終止連体			C	=2-4/5	B	=3-5	<u>B</u>
2類 -タ接続	B	=1-2/5	C	=2-4/5	B	=3-5	?

表4に福井3型の動詞語形をまとめる。新田哲夫(2012)、松倉昂平(2014)、松倉・新田(2016)によれば、福井県あわら市の諸地点で4拍以上の語形や否定形での平準化傾向がみられる

ものの、3 拍以下の語形については対応する名詞と共通の変化を経たとみられる系列での実現形となっている。

2 類動詞の 4 拍語形（「下がらぬ」「取られる」「取らせる」）は中央式との対応からは A 系列が期待されるが、ほぼ全地点で B 系列となっている。中央式で区別される 2-4/5 類が共に C 系列で区別がないことは、2-5 類の語末下降が下げ核に合流しなかったことを意味するが、これは加賀方言や白峰方言とも共通する特徴である。

これに対応する隠岐 3 型の動詞語形を広戸・大原(1953)の掲載データに基づいて表 5 にまとめる。一類動詞終止連体形の 2 拍語形の括弧内は島前での実現形である。⁴

表 5: 隠岐 3 型の動詞語形の所属系列（複合動詞を除く）

1 類終止連体			A(~B)	=2-1(~=1-1?)	A	=3-1/2/4	A
1 類 -タ接続	B	=1-1/2	<u>A</u>	≠2-2, =2-1	A	=3-1/2/4	A
2 類終止連体			C	=2-4/5	B	=3-5	A
2 類 -タ接続	<u>C</u>	=1-3/5	C	=2-4/5	B	=3-5	A

名詞の場合と同様、動詞語形についても隠岐三型は福井三型とよく似ている。しかし、数少ない相違点が両者の経てきた変化を握る重要な手掛かりとなっている。

名詞の場合と同様、1 拍動詞語形の系列は福井のそれと異なっている。去声低結式の 1-5 類は有核型の 1-3 類と合流し、「見た」「出た」等が一旦有核になったあと、語頭核の非核化によって成立した C 系列に帰着したとみられる。名詞 1-5 類と 2 類動詞 1 拍語形の有核化は、外輪・中輪体系に共通の変化であり、上げ核の昇り核化、つまり、L*[(1-3 類)の上昇開始が早まる変化に伴うものであると考えられる。

一方、1 類動詞 2 拍語形のタ接続形が、名詞の無核低結式である 2-2 類とは異なる変化を経ている。これは品詞による型の分裂であり、形態変化としてのアクセント変化が起きたと想定しなければならない。名詞で起きたと考えられる変化が(1)a に続く降り核化かあるいは(1)c による語末核型との合流、動詞語形で起きたと考えられる変化が(1)b による高結式との合流である。動詞語形は、2 拍語形だけでなく、3 拍語形の A 系列も(1)b による高結式との合流を経ていると解釈できる。(1)c に引き続いては、昇り核化も降り核化も起こりうる。したがって、(1)a が起きて 2-2/3 類, 3-2/4 類が合流したと考えられる中央式や福井三型は降り核化を経ていると断定できるが、(1)bc では昇り核化と降り核化のどちらの変化

⁴ 無核型 1 拍語形に対応する B 系列であるので、終止連体形の末音節を付属語と再解釈する類推変化によるものとして分析した。

が起きたかを決定できない。しかし、上に述べた 1-5 類の動詞語形・名詞に共通の有核化は、(1)c に続く昇り核化を支持すると考える。

音声学会の口頭発表では、名詞の(1)c が動詞語形の(1)b に先行する場合について論じた。名詞の(1)c は、低結式の側が語末核側に合流する変化であるが、動詞語形には表 3 にみるように語末核型がなかったためこの合流が起きなかった、と考える。音声的により詳しく説明すると、]L[のくぼみ音調の下降側が、名詞では語末核型と同様に任意となったのに対し、動詞では必須のままで、1 類動詞の「高起性」が保たれた、ということになる。動詞の形態論的な系列性が分裂を妨げた、とする説である。

もう一つの可能性として、動詞語形の(1)b が先行して起き、名詞側で(1)c が起きた際に動詞にはこの変化を起こすような語末くぼみ音調の動詞語形が残っていなかった、という説明もありうる。この場合は、動詞語形の系列性を 4 系列から 2 系列、あるいは 1 類動詞のみ高結式に合流する 3 系列へ減らすような形態変化として(1)a を位置付けることになる。

動詞語形側(1)b と名詞側(1)c のどちらが先に起きたのか、あるいは、1 拍語で動詞語形と名詞に共通に起きたと考えられる(2)b との時間的關係は、隠岐の体系のみからはわからない。しかし、中央式や福井 3 型で名詞と動詞語形に共通して起きた(1)a の変化が、隠岐 3 型ではおそらく名詞にも動詞語形にも及んでいないだろう、というのが現時点での結論である。

4. 言語地理学的考察

隠岐三型体系は、金田一(1972)の観察の通り、中国地方の諸方言のアクセント体系との共通点が多い。これを、系統分岐としてではなく、それぞれが経た「改新の束」として言語地理学的に考察する。

表 6: 隠岐 3 型・出雲外輪・中国中輪の 1 類・2 類動詞形の対照

隠岐	A~B C	A B	A C	B C	A C	A C	(A) (C)
出雲	ウク カ*]ク	ウカン カカ*]ン	ウイ-タ カ*]イ-タ	ウケ カ*]ケ	ウカズ カカ*]ズ	ウケ-バ カ*]ケ-バ	ウイ-タラ カ*]イ-タラ
中輪	ウク カ*]ク	ウカン カカ*]ン	ウイ-タ カ*]イ-タ	ウケ カ*]ケ	ウカ-*]ズ カ*]カ-ズ	ウケ-*]バ カ*]ケ-バ	ウイ-タ*]ラ カ*]イ-タラ

表 6 に広戸・大原(1953)に拠って、隠岐三型と出雲外輪、中国中輪の 3 体系の動詞語形の対照を示す。上段が 1 類動詞、下段が 2 類動詞の例である。動詞語形は、隠岐では助動

詞が未然形と統合したウカン/カカンが3拍語形、他は2拍語形であるが、隠岐1類でB系列の出るウク/カク、ウケ/カケは、隠岐で1拍語形+付属語と再解釈されている可能性がある。

出雲外輪・中国中輪は、共に1類動詞で無核、2類動詞で次末核という平安アクセントの系列性を保持しているという解釈が可能である。ただし、中輪式1類動詞のウカ]ズとウケ]バについては、付属語ズ・バが平安アクセントの低起有核という特徴を動詞接続付属語のみの付属語アクセント実現型として保持している、あるいは、2-2類対応の已然形ウケは有核の助詞バとの接続で(1)bではなく名詞と同様の(1)cを経た、といったアドホックな説明が必要になる。この解釈では、隠岐だけでなく、出雲外輪・中国中輪で共通して1類動詞語形の1拍くぼみ音調が(1)bの tone leveling を経たという解釈となる。名詞側は、出雲外輪が動詞と同じく1拍語で(2)b, 2・3拍語で(1)b、中国中輪と隠岐三型とは1拍語で(2)b, 2・3拍語で(1)cという変化を経ていると想定される。

一方、付属語側で目を引くのは、中国中輪では付属語に有核と無核の区別があるのに対して、出雲外輪ではすべて無核であり、隠岐三型も付属語による区別なく、無核語接続としての系列性を示している、という点である。出雲外輪と隠岐三型は、付属語を無核化する共通改新を経ていることになる。

出雲外輪の付属語が無核となる、という特徴は、山口(1985)によれば、東北から九州までの外輪式に共通する特徴であるが、この共通性は、動詞語形と名詞が共通に(1)bの tone leveling を経ていることに結び付けられる可能性がある。名詞側がすべて高結式に統合された後、上げ核L*[にはじまる付属語が接続した場合、この付属語の核音節も tone leveling の適用を受けることがありえた、とすれば、付属語の無核化を促したと考えられるからである。

これに対して中輪式では名詞のみ]L[が(1)cを経て語末核化したとすれば、高結式無核型に語頭核型の2拍付属語が接続する場合も、(1)cによって付属語の核に先行する自立語全体の高起性が任意となり、文節全体が1語の有核語のピッチ形となり得たため、特に無核語に接続する付属語の核は安定して実現する、という特徴をもったのではないかと考えられる。にも拘わらず同じく(1)cを経た隠岐三型で付属語の核が失われるのは、無核型が平進であり、語末までHが続いていた中輪式と、本来の無核型が下降式であり付属語に先行して下降が起こりやすかった隠岐三型の違いに結び付けることもできる。あるいは、上野(1992)が見島方言の付属語について指摘しているように、無核型が付属語まで含めて下降

位置が決定されるという、N型アクセント的な性質、つまり語声調的な系列性をもつに至った段階で、隠岐の付属語側のアクセント弁別は失われていたと考えるべきかもしれない。

表6は、中国地方の日本海側（山陰地方）に近接して分布する3つの体系の比較であるが、この地域の内陸側には内輪体系の地域もある。山口(1985)の内輪地方の用言活用形式の比較では「美作大部」として、挙げられた他の内輪地域の特徴をすべて満たさず、用言活用形式に関してはほぼ中輪式と共通と言ってよい体系がある。この特徴には、1拍動詞語形で有核と無核の区別があることと、1類動詞語形が無核型となることを含んでいる。前者は昇り核化の結果、後者は動詞での(1)bの変化として説明したものである。この体系の中国中輪式との違いは、1拍名詞の1-2/3類の統合である。この統合が(1)aの降り核化を経ないで起きたとすると、1拍語で(2)c、2・3拍語で(1)cと、低結式の語末核型との統合が語長に関わらず一貫して起きた、という解釈がもっとも妥当ではないかと思われる。この体系と、岡山県の他地域や兵庫県の但馬地域など、中央式の西側の内輪式が相互に、また中央式や垂井式と、どういう関係にあるかの解明には、さらなる言語地理学的な考察が必要だろう。

最後に、先に昇り核説での本来の無核型に想定される系列性の实在例として取り上げた無核型をもつ萩見島方言の体系について考察する。この無核型は、名義抄式体系の語頭核型に対応するものであり、隠岐3型体系と同様に語頭核の非核化を経ているとみられる。岡野信子(1970)のデータによれば本来の無核型名詞はほぼ安定して語末核型となっているので、下げ核化する以前の無核型は、(核ではない)語末下降をもつ型であったと考えられる。この場合、上げ核から下げ核への変化の結果、無核型の語末下降H]が語末下げ核H*]になるという、隠岐とは逆の無核型の有核型への統合が起こり得たはずであり。しかし、この下げ核化の前に降り核化を経ているかどうかは、本来の語末核型とみられる2-2/3類、3-2/4類が共に次末核型と語末核型に分裂しているため、名詞の類別からは判断できない。

表7: 萩・見島方言の動詞語形のアクセント型（複合動詞を除く）

1類終止連体			①	=1-1?	②	=2-1?	③
1類 -タ接続	①	=1-1/2	②	=2-1	③(~②)*	=3-1(~≠3-1)	③
2類終止連体			①/③	=2-4/5	②	=3-5	③
2類 -タ接続	①/③	(≠1-5)	①/③	=2-4/5	③(~②)*	≠3-5(~=3-5)	③

*: 括弧内は音便形

ここでは、上野(2002)が安定しているとする動詞形アクセントの記述の分析を表7に示し、降り核化を経ていないという仮説を提案する。①②③は、それぞれ語頭核型、語頭次核型、語頭次次核型であり、①/③が3拍以上の文節で③に下降の出る無核型系列である。

1類動詞と2類動詞の型の弁別は1拍語形と2拍語形のみに残存する。1-5類名詞「歯」は有核型となるものの、2類動詞1拍語形のタ接続形は語頭核型と合流しており、昇り核化を経ているという場合に予想される変化である。1類動詞1・2拍語形のタ接続形が語末核型となり本来の無核型と同形となっていることから、動詞形で(1)b, (2)bの変化を経ているという分析も成り立つ。この二点から、隠岐三型、中国中輪、出雲外輪と共通の変化を経たとみることができる。名詞で2-2/3類、3-2/4類が共に次末核型と語末核型に分裂していることは、下げ核化に伴う語末下降と語末核型の合流が、時間をかけて語彙的拡散 *lexical diffusion* の形で進行し、最終的に合流しなかった語末核型の語の一部が次次末核型に移行した、というような過程で説明できると考える。

以上の仮説を表8にまとめる。

表8 中国地方諸体系の経たアクセント変化

		隠岐三型	萩見島	出雲外輪	中国中輪	美作内輪
A1	(2)b: H[# > H#	N, V	?, V	N, V	N, V	V
	(2)c: H[# > L*[#					N
A2	(1)b:]L[# > H#	V	V	N, V	V	V
	(1)c:]L[# > L*[#	N	(N?)		N	N
B	付属語の無核化	✓	✓	✓		
C	L*] > [*R > *H	✓	✓	✓	✓	✓
D	語頭核の非核化	✓	✓			
E	[*H > H*]	✓	✓	✓	✓	✓
F	(本来の無核型)	2/3 拍後降	語末下降	不降	不降	不降
G	語末核③非核化	✓				
H	語末下降の核化		✓			

A-Hは、ほぼ時系列的に並べることを試みた。ただし、「無核低結式(くぼみ音調)」の1拍語形(A1)と2・3拍語形(A2)については、各2種ある場合の名詞の変化(N)と動詞

の変化（V）の関係は、出雲外輪で単一の変化でありこれがA2の前に完結していた可能性がある、という以外は不詳である。

すべての体系が経ていると考えるのが、1類動詞語形の無核高結式への統合(A3.4)と、1拍動詞語形での1類（「着て」「寝て」）無核・2類（「見て」「来て」）有核を根拠とするC（上げ核の昇り核化）とそれに続くE（昇り核の下げ核化）である。DはCに伴う変化であり、さらに、本来の無核型が下降タイプに変化していた（F）体系のうち、Gが続いた隠岐では三型化したのに対し、見島では位置アクセントを保つ変化Hがあったと考える。

表8は、アクセントの系統分化は無核型の変異が先行して進行し、有核型での核の変化は無核型の違いによる系統を越えて地理的に拡散しうる、というアクセント変化モデルにより、「外輪」「中輪」「内輪」3体系と特異な隠岐3型・萩見島位置アクセントが近接する中国地方のアクセント分布を、それぞれの体系に及んだアクセント変化の波が作り出した「等語線の束」で説明することを試みたものである。「外輪」「中輪」「内輪」といった特徴は、不安定であつたらう低結式の取り得た3種類の変化からの選択により、それぞれの地域で個別に発生したものであり、系統分化に対応するものではない。また、隠岐と福井の三型の類似も、無核型の取り得たピッチ型のうち、下降タイプを選択した体系が、上げ核から下げ核へという核の逆転の結果、異なる経路を経ていながら似た体系を作り出した、という説明となる。同様の分析は、位置アクセント体系が分布する他の地域でも可能であろう。これらの地域の方言についても、名詞の類別だけでなく動詞体系の変化にも着目して、アクセント変化の等語線を見直す一助になることを期待して、この仮説を提示する。

参考文献

- 上野善道(1975)「アクセント素の弁別的特徴」『言語の科学』6. 23-65.
- 上野善道(1977)「日本語のアクセント」『岩波講座日本語 5 音韻』岩波書店. 281-321.
- 上野善道(1983)「隠岐島久見アクセント再論(1)」『言語学論集'83』65-77.
- 上野善道(1984)「N 型アクセントの一般特性について」『現代方言学の課題 2 記述的研究編』明治書院. 167-209.
- 上野善道(1988)「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集'88』35-73.
- 上野善道(1989)「隠岐島中村方言のアクセント交替」『国語研究』52. 1-24.
- 上野善道(1992)「見島方言の付属語のアクセント」『金沢大学日本海域研究所報告』24.157-168.

- 上野善道(2002)「見島方言の用言のアクセント調査報告」『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究』3.1-54.
- 上野善道(2012)「N型アクセントとは何か」『音声研究』16-1.44-62.
- 岡野信子(1970)「萩市見島方言の語アクセント」『国文学研究』6.141-153.
- 川上夔(1975)「隠岐五箇村久美方言のアクセント体系」『国語学』105.35-43.
- 川上夔(1983)「アクセントにおける位置の対立」『国語研究』46.51-61.
- 川上夔(1997)「高さアクセントの記述：段、向き、契機、核など」『音声研究』1-2.20-27.
- 金田一春彦(1972)「隠岐アクセントの系譜」『現代言語学』三省堂. 615-650.
- 児玉望(2017)「アクセント核はどこから来たか」『熊本大学言語学論集』16.1-34.
- 児玉望(2020)「アクセント核はどう変わるか」『熊本大学人文科学論叢』1.45-64.
- 新田哲夫(1985)「石川県白峰方言のアクセント体系」『金沢大学文学部論集 文学科篇』5.97-116.
- 新田哲夫(2012)「福井県越前町小樟方言のアクセント」『音声研究』16-1.63-79.
- 服部四郎(1973)「アクセント素とは何か？そしてその弁別的特徴とは？」『言語の科学』4. 1-61
- 早田輝洋(1977)「生成アクセント論」『岩波講座日本語 5 音韻』岩波書店. 323-360.
- 早田輝洋(1983)「五箇村久見方言の名詞のアクセント」『文学研究』80.71-83.
- 広戸惇・大原孝道(1953)『山陰地方のアクセント』報光社.
- 松倉昂平(2014)「福井県あわら市のアクセント分布」『東京大学言語学論集』35. 141-154.
- 松倉昂平(2017)「福井市西部沿岸部及び東部山間部のアクセント分布」『東京大学言語学論集』38. 101-122.
- 松倉昂平・新田哲夫(2016)「福井三型アクセントの共時的特性の対照」『音声研究』20-3.81-94.
- 屋名池誠(2004)「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』8-2. 46-57.
- 山口幸洋(1985)「東京式諸方言の文節アクセント体系」『国語学』142.23-38.

(こだま・のぞみ 熊本大学)